



中村俊定文庫
文庫 18
161



世集者東武之挑隣先師芭蕉吊十七年忌
追善之集也

正德三春月夕本寫之

隨飄軒

素木

象津原

挑隣撰



ゆく川の流さぬとて



水は流るといふ明の事端で先づ

りとも斯のことゝ一之神七と成

の卯月中旬芭蕉翁の四脚

獨がゝて東氏と三つれき心

はつて那波の津よゝ系をま

えつゝそゆるとわゝりて

のちろろは長途のばれ身の

つねのいほちれうくゆゑ

そとろろは分ちゆて

水は月やすゑのりほの

振え鞍は其角う差し

暮し包て江列雲津

とていひぬる事か

屋は伊賀伊豫の

伝書は善くは起



り小灌さあ、本園、三箇より
これ、諸玉のつや、陰、ほぐらぬ水
多のまよ、水実のちね、ねゆる、又通
め、力と、腹、押、お、れ、の、許、よ
わ、り、ち、を、茶、と、ゆ、の、ま、う、こ、小、之
より一師より、西師、小、ゆ、る、に、流
義、ち、八、宗、の、格、品、く、る、道、行、道、と、し
意、氣、う、進、を、作、小、傾、く、文、く、地、の、
る、い、多、端、一、流、の、う、ま、を、せ、と、し、て
唯、む、と、る、より、ち、を、ま、よ、れ、と、入、て、東
話、と、あ、の、む、務、と、せ、ま、多、く、と、い、つ、
の、之、ま、た、ま、い、れ、と、ね、く、ち、は、り、ね、く
かり、て、終、り、し、ゆ、る、は、善、功、部、小
能、細、し、て、風、雅、流、進、流、の、お、川、の、い、
わ、り、の、お、り、る、を、な、つ、れ、ね、く、て、い、
一、其、の、お、り、る、一、取、小、こ、と、し、十月
十二日、七、回、を、し、り、て、又、懐、舊、の、思、
を、む、り、ね、く、れ、ち、ね、く、一、集、と、綴、り、
重、魂、と、訪、て、佛、果、菩、提、と、祈、願、を、

これ、も、予、う、能、力、ゆ、の、九、半、う、一、毛、余
及、り、地、の、せ、と、の、許、字、能、白、痴、の、法、一
列、よ、う、か、し、て、ま、白、ゆ、り、を、一、口、の、
誇、り、は、ち、ち、ら、ん、進、進、の、り、一、流、衆
中、合、作、の、名、を、と、重、音、子、い、く、ち、か、り、
ち、ち、あ、り、ち、ち、ら、ん、益、活、活、の、ち、ね、は、
速、小、吊、と、ね、ん、こ、と、疑、い、る、
回、願、往、生、無、量、壽、國

能の秀人せよ、ゆ、は、師、う、一、件、ゆ、ち、ゆ、よ、
う、と、門、の、雜、法、よ、り、ち、再、の、ま、は、又
わ、り、ち、小、意、を、つ、ち、の、り、ね、
ほ、と、あ、り、ち、ち、ら、ん、ち、ち、ら、ん、ち、ち、ら、ん、
五月の月、ひ、り、重、く、
身、多、端、や、五、人、の、ち、ち、ら、ん、
ま、い、ま、移、更、の、り、
五月の空、ち、ち、ら、ん、満、昌、滿、地、は、海、を、
奈、客、く、ち、ち、ら、ん、合、つ、ち、ち、ら、ん、ま、い、ち、ち、ら、ん、
感、し、ち、ち、ら、ん、ま、い、ち、ち、ら、ん、

又

七夕の参白古来いふはあまのこ
ねと天のこをいふもあまのこ
のこはあまのこといふもあまのこ
のこはあまのこといふもあまのこ

又月や六日と昔れあまのこはあまのこ

昔と昔言はれあまのこはあまのこ
あまのこはあまのこ

湖水の月よ名振りて

二舟寺の門をくぐりてあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ
あまのこはあまのこはあまのこ

中園の御の心あまのこはあまのこ

よ宿の實盛う権甲竹のり
あまのこはあまのこ

むらんあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ
あまのこはあまのこはあまのこ

昔年七年のあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ
あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ
あまのこはあまのこはあまのこ

ほのろ雲のうらさの雲のうらさの雲
予う屍の埋所下谷新芝の寺下月を想
ふらと云お侍受まう九已十戒と持
真信ゆらう善持入る日これ所化日
謀一萬三千遍六も真讀し朝言
疑し多るは福定は入ること一帯怪快
樂乃て記して唯佛圓は往生の二教と
社ら海邊佛もゆ流しを海故小太の
寺向卯塔の傍も逆修の石碑を建て
持せまて徳を現を未集とも小お原
尸知切を修

於苞蕉居士牌前一夜別時追福之
訛語

十七年の舊功とと立身し上中下品乃
中下坐し物んと推こかりて 拙翁百行

納豆けいほ曼陀のまじり少路

臺乃蓮を拓し後 芥こ

扱を此扱胃の気や同く洗

日也よ満く各御用 石

鱈の食ゆりよ月の ち

魚籠のあなは思塗る 森

福汐はは檀所潜の佃漁

雅は流屋む庭極乃 快

礼日乃は心もくもらんなる

和化のゆはの骨行が扱

阿耨多羅三藐院のいもね 死

五版を居て又は後 とい

年米れら相暮し海の道い

とて梅の腕乃 入器

聖天の形は物 道ん者

玉由は畑利場を舍利場とす

病醫よ又を看るやち月花

ちんをれ香物と梅の物ト
初午ぬ梳がらるる 福荷前

多に白粉と駕の 行便
三三醫師を扱ふる言 衛
湯風呂場いハ四季乃 解
大通解にが較ちる一解
夜後電股尻と鈴の極事
人魔と六人中小ほのく
淀殿のまは 弟あて淀川
静る女葵系れうみ
邦 三月に書ら 増明
そぬ元乃胸の月中は毎に
通天とくく 江戸乃 業
水派と再通海をた病物
淫乱をまは 三行と短令
親のふと家をせらく二挺立
南無の派泡佛 百八の序
西より白字は 雲香の巻
似序の印徳中 日成 專

勸詞毫よき山乃通懐舊れん作
主述ハ但是列し書五至 白所ハ
混雜仍のわふり儀ハ

在元乃邦之のやをれ批 釋 金御

箱のあまこくは

古一花控應之書や 居瓢 九梅

題挑青居十七回忌追善 白糸

十有七年向始冬

挑門技抄報師功

樂邦到日當哥舞

香薫巻舒回詠雄

巻舒正心経を百五拾四巻 全

魏去江州一十七年

理散歌栗津経日月算

方より大百十挑箱と名師也早を忘
て道とて中道とてわすれは是古
るれハ一集と稱して述志也

重信如形五の膳氷の如く

寂曇之身乃道首法橋不肖

門人挑翁若尾甲之祝其忌在焉

平翁とのほろれちいゝの碑乃
京言水

蕉翁十七回忌といふ挑翁挑翁の

一体と申仙御仙御は長長一一きり 我星

世は傳傳ふ翁の思思存存冷冷めり
ほゆるくまれむる處處ある

龍門京上之器物龍門京上之器物

文臺は酒酒通通し 麦麦の何部 鞭石

石の如く十とを十とを集集り 指指の川川の
事事らうて

初翁のつたをつたを指指を打打目目か 路通

方方一一世世れれ高高れれ葉葉のの痛痛白 史白

芭蕉芭蕉といふいふ女女らんらん十二百 伊丹 百磨

初翁乃道首初翁乃道首ととせせんん十七日 京 氏道

吟めを吟めを求求りしし除除一一言言のの録録 十舟

山山系系毛毛乃乃初初翁翁小小童童よよままりりか 金毛

わ乃月わ乃月々々其其ああのの目目れれ回回いい行行 梅人

木木のりのりしし音音ややとと乃乃初初翁翁のの耳耳小小 鬼脛

奥州奥州京城京城なるなる道道下下れれままるる 岩城 政宗

村村竹竹而而先先々々向向とともも此此月月ををままるる 十といひ十といひゆゆ七七ををれれるる

兼兼衣衣小小衣衣一一置置るる 蕉翁の歌の

若若河河をを乃乃せせむむとと筆筆をを入入初初翁翁のの後後 露沾

吊芭蕉 方方一一世世のの初初めめりり之之はは年年々々とと 英成

初初めめりり之之はは年年々々とと 怨専

羊腸のくもむねしき苔の跡に下
現夕を待よむえの山く務 馬道

吉中り御乃の吹草屋座は御

今もとの性のおもて木の葉は 市荷

潮をくた風をき一曇とこ所 市梅

葉のむらたれお憤の鳥のふ 右巴

もねよ並つマ曇もみち程 里友

字とともいぬ 望具と和の 露草

霜よ回ん主ハ代ハ此節石 石川

星霜舊十七回葉風戦長慶禪崖彩
雲輝江東石碑秀人佳作風雅悉盡
矣本末無一物而残号於俳林惟是
顯仁性之跡哉

お拓乃中よふ家ねふ古墳ハ 仙化

多ハ拓那ハ 其跡まも

文人乃く 履音ハ拓尾なる 竹人

兼あり鎌を吾ハ 其言筆年

空の霜よ芭蕉うす乃鎌を拓ね 會津 錦角

葉のハハハハハハハハハハ 蚪諷

無衣の木の葉宗一 錦川

靈胎落や旭よ消ぬ 唾吟

紅葉並莫よ 露鳥

月をわき其角丸 白琴

其人ハ妙うらん 秋林

以雅人のむう 友水

冬宿のあつ 松皮

世乃るお鼓 止夕

百圓や格色 和葉

お拓乃中れ 和由

解廓を 儿陶

芭蕉のあふふ 今更と今更の眉所
わが きりこころ 中七月のをき
ねが し 柳のくハ 追吾のふを

よき世にて一葉をぬきて後田をよむ
世に御風の目をやうに花の破れ
言の末信いよとよ人の佳化
よいか 感通するはうの四徹を
よき世に盡すはうの九

相とるのうたのむし 青流

よき世に花をぬきて後田をよむ

納豆の種ゆかき 秋色

落氷の痛みのとけ 寒王

十とをいふやとせ 一将巻

騎鶴帰来十七年 斗南山人

誅諸壙裏舊神仏

憐君咳唾為珠玉

蓋古清川不寂然

芥子園のうたのむし 後田の橋と

あつりしは 夏川

後田のうたのむし

とよと 淵泉

四色の多きよとよ 拾翠

深川は 残耕

海を 其石

是を 夫英

よの 江戸

よの 常行

よの 孤和

よの 常行

よの 常行

よの 常行

よの 常行

よの 常行

風と江とあそぶ松の姿

提葛

ゆりも松も柳もわの徳

今從

牛系捨取理一以雅章

蝶ト

随言や山系り此等五子葉

雪水

仲もよきはるよ中ノ

田方

柳更よとくこと

芥子

世に心をたのむ人々神音

西村
南桂

と神とてのちやまをれや

蘭臺

政とて神深川のなまを

乙女

度形川流る相向く名を神

仁王經史事云々

世間や卯あつらよら九月

如高

常事ありんて世をくまの心

和風

るはあつらふとついで七の

寛慶

りよとてえぬ向く神々

山夕

本ありしは便や山や

十七座

秋のいよ神や少曲の行の楯

貞仍

他名のき風邦畿も松の心

巡えとまき所待せん菊の心

浮生

南を信るて字のゆいしを相お梅

豆真

ね月のちとふとせ所ほす夜

松言の松とてををを

圓石

記とえれいさふとけん善と竹

甲列
立唯

松言の松もつとれせそ松把のむ

藤系

柳を言と信り人々こと松葉の

安保

多福と松とてををを

方水

柿の女もなすは松や若れお

棹歌

年よこの松よまけけの音

調和

時西月まこととまきと芭蕉墳

重頼

そちの或る人伴いし初てまは

初身由神のまを松葉のまを松

松

其時にもあつたかと思ふ。一峰

遠くは山に雲は白く、地は田舎の
山に雲は白く、地は田舎の
山に雲は白く、地は田舎の

子寄りて花入挿し物椿 予々
と序中交りて、此のまゝと云は
れは、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、

本わし、
と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、

と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、

世も、
と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、

也行、
と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、

是れ、
と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、
と云は、挿梅の白粉、

櫻うらむ 柗ゆゑ なるや 一むら

今我

柗ゆゑ なるや 一むら

松花

粟津の系孔丁なる心

柗ゆゑ なるや 一むら

和英

柗ゆゑ なるや 一むら

如毛

柗ゆゑ なるや 一むら

魚

柗ゆゑ なるや 一むら

調嘉

柗ゆゑ なるや 一むら

松花

柗ゆゑ なるや 一むら

桃白

柗ゆゑ なるや 一むら

桃紅

他所乃の白行諸國の門等

いづれにありて

柗ゆゑ なるや 一むら

柗翁

詠祖 松永道遠軒長頭凡身徳

北村拾穂軒再昌院法印李吟

松尾釣月軒芭蕉翁桃青居士

天野吳竹軒大白堂桃翁

下

仰

宝永七庚寅之十月十二日

桃青之棟者東方朔之繁餘而青之

滑稽者侯吞翔鳴呼翁と一見遺

文便人絶倒秀作佳珍鳴三津及蝦

夷分孤引流之門人若干不可枚舉

發其後直者或魯也不魯或翔也多

與翁齟齬也適得其志者終江東之

二三子耳其角嵐亭者先亡矣桃翁

一人身繼其業今年以荏翁之遠志
演追福之志獨吟及招它款哥連訛
之佳作十有七之年浪者敲粟津磯
都鄙之好士者便架艦而集既成矣
題以京名橋南之震龍各一閱遂為
之跋尾寶永七庚寅之初冬

野震龍齋稿

□ □

佐文山書

□ □

